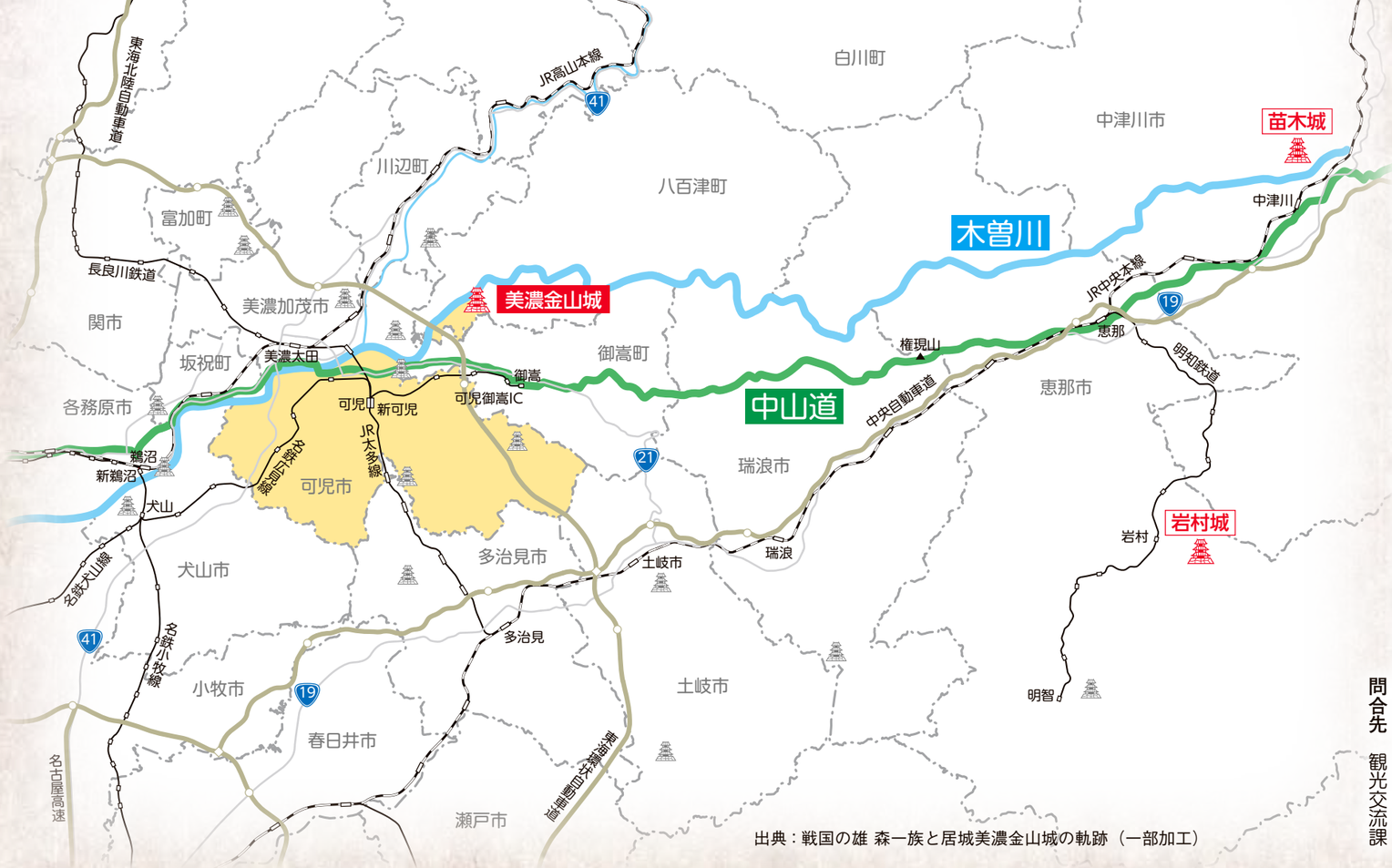
可児から発信、「東美濃」

中山道、木曽川が通り、文化や経済など古くから交流のあった東美濃。その一帯を東美濃ブランドとして観光を盛り上げていく動きと、歴史的背景を紹介します。

問合先　観光交流課



出典：戦国の雄 森一族と居城美濃金山城の軌跡（一部加工）

東美濃と中山道

東美濃とは、一般に美濃国の東部を表し、古くは東濃4郡（恵那、土岐、可児、加茂）と呼ばれました。この地域は中山道が通っていたことでも知られています。街道を通じて人や物の交流も盛んに行われ、東濃弁などの方言や食生活、文化などに共通点が見られます。

東美濃活性化の動き

今年7月には「ツーリズム東美濃協議会」と「ひがしみの歴史街道協議会」が設立されました。

ツーリズム東美濃協議会は東濃6市（可児、中津川、恵那、瑞浪、土岐、多治見）の商工会議所と中部経済連合会が地域経済の活性化を目指して設立。ひがしみの歴史街道協議会はリニア中央新幹線の沿線7市町（前述の6市と御嵩町）と観光協会、県が魅力ある観光地づくりを目指して設立しました。いずれも歴史や伝統文化、地場産業などを生かした広域的な観光振興に取り組んでいきます。

観光パスポートで東美濃を巡ろう

ひがしみの歴史街道協議会による観光パスポート事業です。

7市町の観光案内所や道の駅で発給される観光パスポートを持って参加施設を訪れると、独自の特典が受けられます。さらに施設を利用してスタンプを集めると、プレゼント抽選に応募できます。賞品や参加施設など詳しくはホームページをご覧ください。

期間　平成30年2月28日（水）まで

問合先　ひがしみの観光パスポート事務局☎0558（265）7504

東美濃から発信“可児の宝もの”

壱

続百名城　美濃金山城跡

国史跡・美濃金山城跡をはじめ、市内には10の城跡があります。美濃金山城跡は今年9月に全国に誇る県内の観光資源「岐阜の宝もの」に苗木城跡（中津川市）、岩村城跡と岩村城下町（恵那市）と一体で認定されました。

ガイドツアーや保全活動などが評価されたもので、東美濃の新たな観光資源として期待されます。

弐

美濃桃山陶の聖地

かつては志野・瀬戸黒をはじめとした陶器は、瀬戸（愛知県）で焼かれたと考えられていました。しかし人間国宝の陶芸家・荒川豊蔵が久々利大萱で筍絵のある古志野の陶片を発見したことで、これらの陶器が可児を含む東美濃の各地域で作られていたことが実証されました。市は豊蔵が生活・作陶していた地を整備し、陶芸の歴史とともに美濃桃山陶の聖地として今年4月から公開しています。

参

癒しの空間　木曽川左岸

「木曽のかけはし　太田の渡し　碓氷峠がなくばよい」とうたわれたように、東美濃を流れる木曽川の渡し場は中山道の難所として知られていました。市内にある「今渡の渡し場」は、昭和2年の太田橋開通によりその役割を終えました。渡し場周辺は今後「かわのほとりの散歩道の会」によるかわまちづくりが進められ、市民が集える憩いの場として整備されていきます。

東美濃の豆知識

戦国時代の東美濃

戦国時代、交通の要衝である東美濃は織田信長や武田信玄など多くの戦国武将が進出を図りました。

信長や秀吉の勢力拡大に合わせ、重臣の森氏は美濃金山城、岩村城、苗木城などを治めていきます。森氏の領地は東美濃全域に及び、当時の権力者がこの地域を一つの区域として捉えていたことがうかがえます。

森氏の当主、森長可画像（可成寺所蔵）

兼山札（さつ）

中山道と木曽川の近くに位置する兼山は、戦国時代から物流の拠点として栄えました。江戸時代末期になると貨幣経済が発展し、小銭が不足するようになったため、小銭札（兼山札）が発行されるようになりました。

兼山札は主に東美濃で流通していた他、遠くは信州の一部でも使われたようです。

東美濃の地歌舞伎

俗に「東濃の芝居、西濃の花火」という言葉があります。この言葉のとおり、西美濃と東美濃では文化に違いがあると思われていたようです。

東美濃の地歌舞伎（地芝居）については、現在も中津川市など県内各地で公演が行われています。可児でも戦前の庶民の娯楽といえば地歌舞伎で、専用の小屋があるほどでした。市内には現在も地歌舞伎の同好会があり、その文化が引き継がれています。